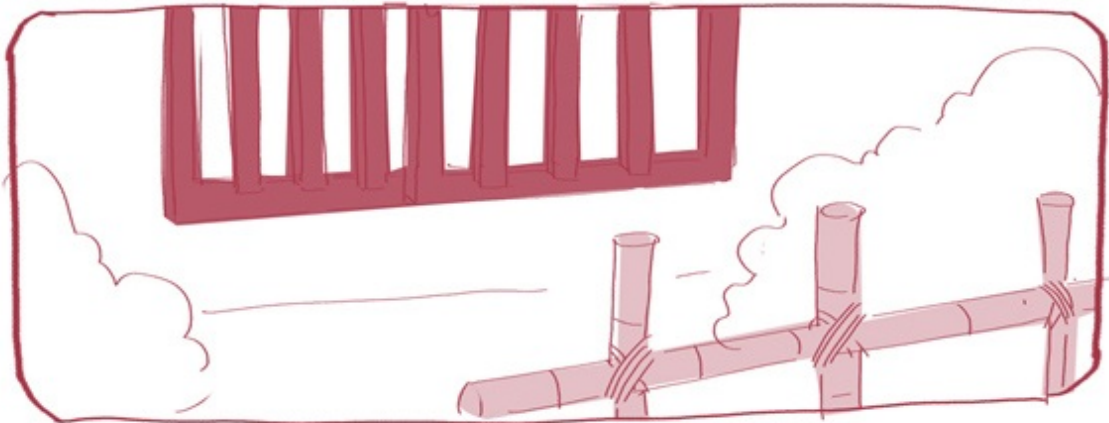


しるし

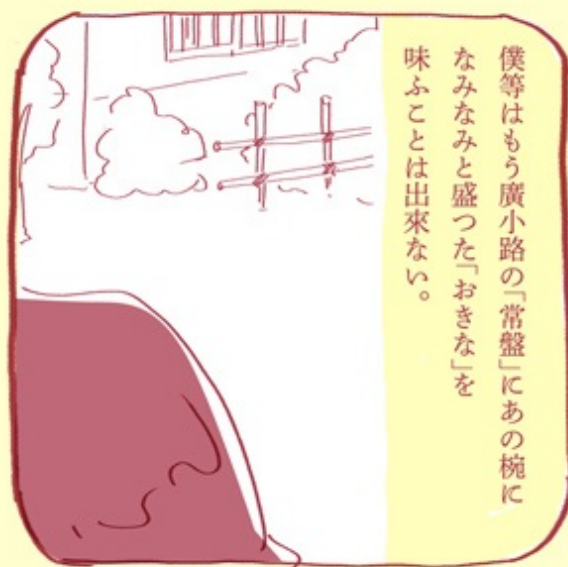
原作：芥川龍之介  
まんが：オカヤイツミ











これは僕等下戸仲間の爲には少からぬ損失である。  
のみならず僕等の東京の爲にもやはり少からぬ  
損失である。



それも「常盤」の「しるこ」に匹敵するほどの珈琲を  
飲ませるカッフェでもあれば、まだ僕等は仕合せで  
あらう。が、かう云ふ珈琲を飲むことも現在ではち  
よつと不可能である。



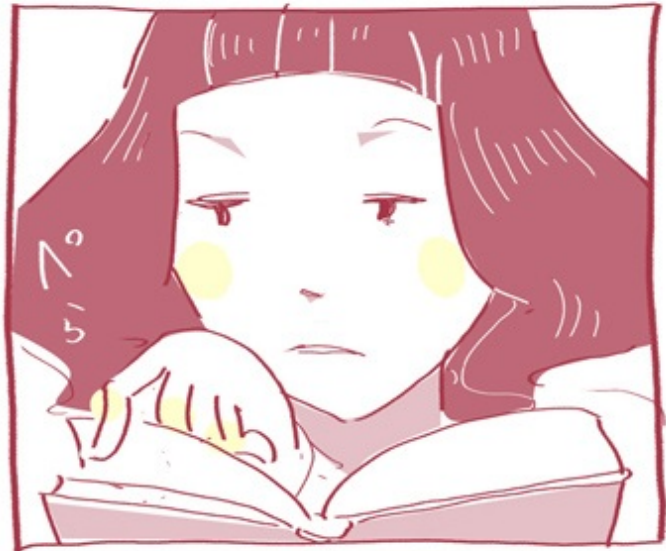
僕はその爲にも「しるこ」屋の  
ないことを情けないことの  
一つに數へざるを得ない。







「しるこ」は西洋料理や支那料理と一しよに東京の「しるこ」を第一としてゐる。(或は「してゐた」と言はなければならぬ。)しかもまだ紅毛人たちは「しるこ」の味を知つてゐない。若し一度知つたとすれば、「しるこ」も亦或は麻雀戲のやうに世界を風靡しないとも限らないのである。



帝國ホテルや精養軒のマネエヂヤア諸君は何かの機會に紅毛人たちにも一碗の「しるこ」をすすめて見るが善い。彼等は天ぶらを愛するやうに「しるこ」をも必ず——愛するかどうかは多少の疑問はあるにもせよ、兎に角一應はすすめて見る價值のあることだけは確かであらう。



いいよな！  
サリギツ  
エリナ。

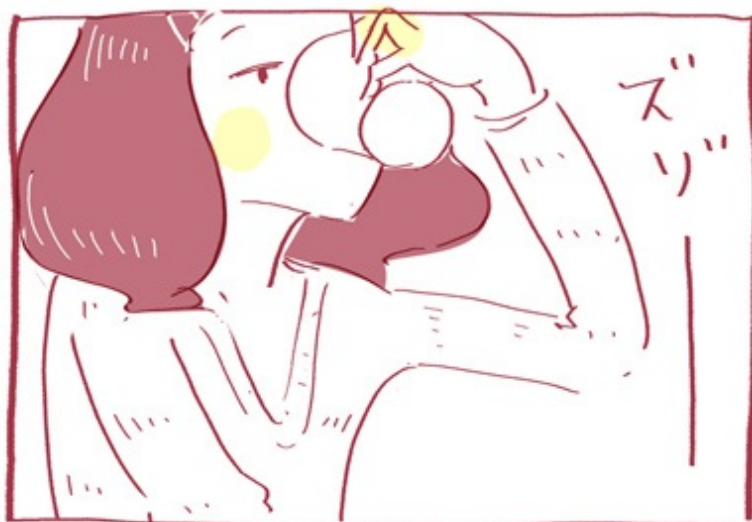
えー！



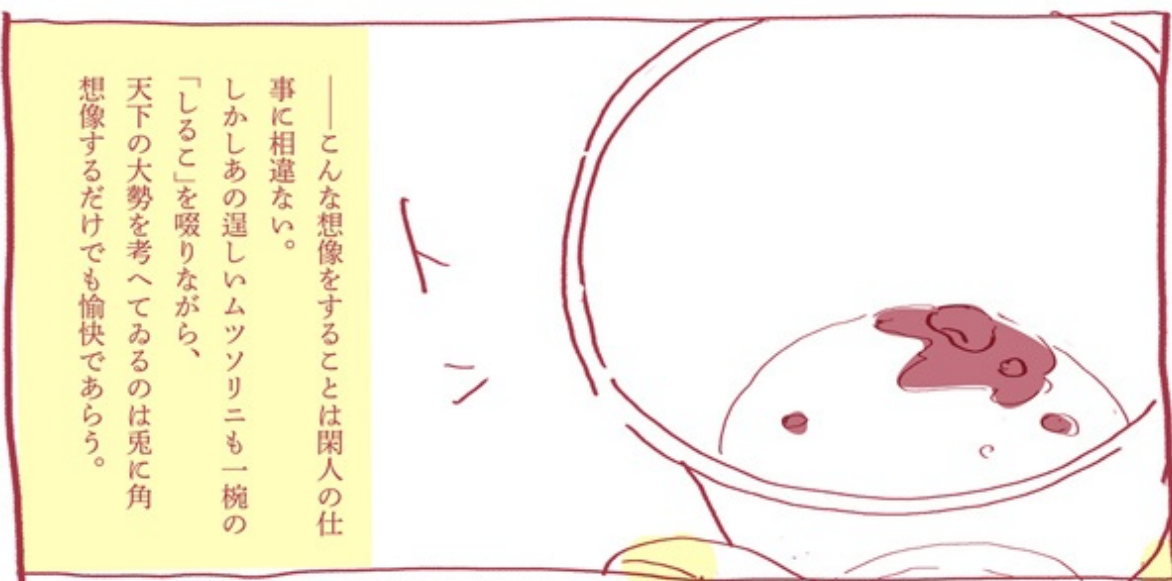




僕は今もベンを持つたまま、  
はるかにニユウヨオクの或クラブに  
紅毛人の男女が七八人、  
一碗の「しるこ」を啜りながら、  
チャアリ、チャプリンの離婚問題か何か  
を話してゐる光景を想像してゐる。



それから又パリの或カツフエにやはり  
紅毛人の畫家が一人、  
一碗の「しるこ」を啜りながら、



——こんな想像をすることは閑人の仕  
事に相違ない。  
しかしあの遅しいムツソリニも一碗の  
「しるこ」を啜りながら、  
天下の大勢を考へてゐるのは兎に角  
想像するだけでも愉快であらう。





しる = 777A04-1) お待ちのお客さま

## しるこ

<http://p.booklog.jp/book/24840>

著者：オカヤイツミ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/okayaidumi/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/24840>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/24840>